

二〇二二年度

併願優遇入試Ⅰ・一般入試Ⅰ 入学試験問題

国語（五十分）（全十二ページ）

〈注意〉

- 一. 試験開始の指示があるまで、この問題冊子・解答用紙を開けてはいけません。
- 二. 試験開始の指示と同時に、解答用紙に受験番号と氏名を書きなさい。
- 三. 試験開始後、問題冊子がそろっていないか、印刷がはつきりしないところがあったら、手をあげて試験監督に知らせなさい。
- 四. 解答はすべて解答用紙の指定されたところに書きなさい。
- 五. 記述問題で字数制限がある場合は、句読点・記号も一字として数えなさい。
- 六. 問題文は上下二段になっています。

一 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

【主な登場人物】

◇僕……松岡清澄。高校一年生。手芸が好きで、結婚する姉のため、ウエディングドレスを作ろうと奮闘するが、なかなかうまくいかない。「清澄」という名には、流れる水のように清らかに澄んで、常に動き続けてほしい、という父の願いが込められている。

◇父……「僕」の父親。「僕」が一歳の時離婚して家を出て以来、黒田縫製所でデザイナーとして働いている。

◇母……「僕」の母親。手芸が大の苦手。手芸好きの「僕」が、学校でからかわれたりしないか、心配している。

◇姉……「僕」の姉。産声うぶこえが川のせせらぎのように優しくだったので、父から「水青」と命名された。結婚式を控えているが、なかなか気に入ったウエディングドレスが見つからない。

◇黒田さん……「僕」の父親とは大学の同級生。黒田縫製社長。「僕」にとっては命名の由来を教えてください、ドレスに刺繍を入れるようにアドバイスしてくれる、父親以上に父親のような存在。

◇紺野さん……姉の婚約者。

◇くるみ……クラスメイト。「僕」のよき理解者でもある。

次の場面は、ウエディングドレスに刺繍をしようとする「僕」のもと、紺野さんが訪れ、刺繍をめぐって会話するところから始まる。「僕」は、ドレスをつくった父や、刺繍をするようにアドバイスしてくれた黒田さんのことを思い起し、紺野さんに刺繍の図案がなかなかきまらないことを打ち明ける。

針に通した白い糸を目の高さに持ち上げて、指でぴんと弾いた。糸が揺れる時、一緒になにかが揺れる。「なにか」がなんなのかは自分 **a** よくわからない。「心が揺れる」というの **b** 違う。しいていえば世界 **c** しれない。僕がいる、見ているこの世界全体が、ほんの一瞬姿を変えるのだ。ほんのすこし **d**。でも確実に。

①ガーゼを三重に重ねた白いドレスはふわふわとやわらかい。このあいだ本を読んでいたら「春先につもる雪のような」という表現が出てきて、そのことにすこし驚いた。このあたりでは春先はおろか真冬でも雪がつもることはほとんどない。僕には見たことのない世界がいつばいある。白いガーゼに触れるたびに、そのことを思い出す。

針を刺し入れようとして、やっぱりそこで手がとまってしまう。最初のひと針を入れようとするたび、こうなる。

おい。おい。襖かぶたまの向こうから呼ばれていることに気がついた。「清澄くん」と声は続く。そんなふうに僕の名を呼ぶ人は今のところひとりしか存在しない。顔を上げると、すすすと襖が開いた。紺野さんが顔をのぞかせる。

(中略)

「これが、清澄くんがつくったドレス？」

紺野さんは上体をぐっと反らせて、ボディに着せられたウエディングドレスに見入っている。一週間後の日曜日、姉はこれを着て紺野さんと結婚式を挙げるのだ。

「違いますよ。僕がつくったわけではないんです」

姉から「レンタルのドレスはきらびやか過ぎて、どれも着る気がしない」という趣旨の愚痴を聞かされたのは、春頃のことだった。だったら姉が気にいるようなドレスを僕がつくってあげようと決心したのだ。ドレスを縫った経験な

どなかった。知識もなかった。でもやってみたかった。母はいつものように「やめとき」と言ったけど、なんの根拠もなく自分ならできると思いこんだ。

「でも、だめでした」

どうにもならなくて、父を頼った。僕が一歳の時に母と別れてこの家を出た父。会うたび「金がない」とぼやく父。実年齢より若く見える（つまりなんだか頼りない）父。

②でも黒田縫製に行つた時の父は違つた。父と父の職場の人たちは、ほぼ一日でこのドレスを縫い上げた。

ボディに巻きつけた布を父がちよこちよこつとピンで留めただけで、布は自由自在にかたちを変えた。父の手はオーロラのようなドレープを、雲のようなフリルを、何度でも、何とおりにも、手品みたいにつぎつぎと生み出した。いつものふわふわした眠たげな口調もなりをひそめて、あとからやってきたおばさんたちにてきぱきと指示を出す父はまるきり僕の知らない人だった。

(中略)

ワンピースと呼んでも差し支えないほどシンプルでカジュアルなデザインと風通しの良いガーゼの素材は、人前に出ることが苦手な姉の緊張をきつとやわらげてくれるだろう。

③でも、仕上げは清澄くんがやるんやろ？」

自分の手でドレスを仕上げられなくて落ちこんでいた僕に、黒田さんが「刺繍を入れてみては」というアドバイスをくれた。

黒田さんは父の雇い主というか、相棒というか、そんな感じの人だ。僕にとつてはある意味、父以上に父のような位置づけの人物でもあるのだが、その微妙なニュアンスを紺野さんに説明できる気がしない。すくなくとも今は。

「図案のこと、まだ悩んでるんです」

とにかく「無難」を重んじる姉を尊重して、裾のあたりにだけごく控えめに野の花を刺繍しようと思つていた。白い糸で、近くで見るとそれとわかる程度にさりげなく。でもなにかが違うような気がして、まだひと針もすすめられずにいる。だって僕がしたい刺繍は、そして姉にふさわしいのは「無難」なんかじゃないはずだから。

「でも、式はもう一週間後やで」

「そうなんですけど……」

ドレスはこのままではじゅうぶんすばらしいできばえだ。僕の刺繍で台無しにするようなことがあつてはならないと思うと、なおさら手が動かなくなつてしまふ。

もう時間がない。刺繍を入れるにせよ、入れないにせよ、はやく決めなければならぬのに。

口ごもつてしまった僕をちらりと見て、紺野さんが咳払いをひとつした。

「質問してもいい？」

「どうぞ」

「そもそも、どういうきっかけで刺繍はじめたん？ いや、前から男子の趣味としてはめずらしいんじゃないかなと思つてて」

あ、おかしいとか言うてるわけではないねんで、とぐいぐい身を乗り出してくる紺野さんを「わかつてます、わかつてます」と押し戻した。④刺繍をはじめたきっかけは、祖母がやっていたから。でももちろんそれだけではない。

「刺繍は世界中にあつて、それぞれ違う特徴があるんです」

紺野さんが「へえ、そうなん」とふたたび身を乗り出す。

「たとえば日本にはこぎん刺しっていうのがあるんですけど、これってともと布を丈夫にして暖かくするために糸を重ねたのがはじまりらしくて」

日本だけじゃない。ルーマニアのある地方では、娘が生まれるとすぐにその子の嫁入り道具のシーツや枕カバーに刺繡をはじめ。インドには「ミラーワーク」と呼ばれる鏡を縫いこんだ刺繡の技法がある。鏡が悪いものを反射して身を守ってくれる、と考えられているのだ。

「刺繡はずっと昔から世界中にあつて、手法はいろいろ違うのに、そこにこめられた願いはみんな似てるんです。それってなんか、おもしろいでしょ」

世界中で、誰かが誰かのために祈っている。すこやかであれ、幸せであれ、と。

高校生になってからいろいろな刺繡に関する本を読んだりしているうちに、もつとくわしく刺繡の歴史を知りたいと思うようになった。そこにこめられた人々の思いを、暮らしを、もつと知りたいと。

人に話すのはこれからはじめてだった。目標というほどたしかなものではなかったが、言葉にした瞬間に輪郭を得た。そうか僕はそんなふうにかけていたのかと、目を睜^{みは}る。輪郭をよりくつきりとしたものにしたくて、もう一度口に出した。

「知りたいんです、もつと」

「水青」、「清澄」の名前に因^{ちな}んだ「流れる水」を図案にすることに決めた「僕」は、深夜まで作業に没頭していた。母が部屋に来て、「僕」に声をかけた。

「この刺繡は、あんたの水青にたいする祈りなん？ それとも愛情のあかし？」
母につられて、僕もドレスを見上げた。

うらやましいわ。うっかり転がり落ちたような、母の言葉に耳を疑う。

「うらやましい？ どういう意味？」

「そういうことができることが、うらやましい。そういう発想が、つて言えばええんかな。私はあんたたちのために、雑巾一枚縫うたことない。どうしても、そういう気になられへん」

座った姿勢で見上げているにもかかわらず、母の身体はちいさく、頼りなく見える。

「違う、それは」

「え？」

「僕が刺繡するのは、ただ、楽しいからや」

針を動かしている時が、いちばん楽しい。【一】ただの糸の連なりが、布の上に花を咲かせ、鳥をはばたかせ、水の流れを、うねりを生み出す。そのことが、叫び出したいほどにうれしい。自分の手がそれを生み出していると思うたび、目の眩^{くら}むような熱を感じる。【二】そのたびに息がつかまるほどの幸福に満たされる。【三】

「だから、そういうのがわからへんのよ。私には」

「それでいい」

わかってくれなくてかまわない。わかってほしいなんて思っていない。

【四】僕が動き続けるのを。

川は海へと続いている。流れる水は海へ向かうあいだ、なにを考えているんだろう。ほんとうに海にたどりつけるんだろうかと心細く思ったりしないのだろうか。

僕にだってわからない。わからないけど、また針を動かす。

「僕」はひたすら縫い続けた。明け方、黒田さんと父、くるみに「もうすぐ完成するから見に来てほしい」とメールを送り、ついに最後のひと針を刺し終えた。今、「僕」の目の前にはドレスをまとった姉が、少し照れたようにたたずんでいる。

⑤左肩から胸元にかけて白い糸で垂直に伸びている線は、雨をあらわしている。身体のまわりを一周する細長いステッチを、腰の下から裾に向けていくつも施した。白い布に白い糸で、ごく細く。軽やかでやわらかいガーゼのドレスの質感をそこなわぬように。裾にいくにしたがって、銀糸の割合が多くなっている。

「ちよつと、ターンしてみて」

鏡の前で姉がくるりとまわると、裾に施した銀糸の刺繍がきらつと光った。窓の外の世界は、今や完全に白から濃いクリーム色に変化している。思っていたとおりに、太陽を受けて輝く川が布の上に生まれた。姉が身動きするたび、ドレスが空気をはらんでやわらかく揺れる。水面が風を受けて模様をかたちづくるように。

窓を開けると、朝のすこしつめたい空気が流れこんでくる。畳の上にはちらばった糸くずが舞い上がって、まるで祝福のダンスをしているみたいだ。

姉がスマートフォンを耳に当てる。もしもし、と発した声が弾んでいた。

「すぐに来て。見てほしいねん、ぜったいびつくりするから」

電話の相手はやはりというかなんというか、紺野さんだった。さっきの「気に入った？」の返事はまだ聞けていないけど「すぐ来て、来て」と連呼する姉の頬が紅潮してびかぴかに光っていることが、ぜんぶの答えなんだろう。

(中略)

春先から今日までの記憶が、映画の予告編みたいにつきつきとよみがえった。

「走馬灯のように」でもいいけどそれだと今にも死んでしまいそうで、なんだか嫌だった。生きてやることが、まだたくさんあるんだから。

チャイムが鳴って、顔を見合わせる。

「紺野さん？ もう来たん？」

「いや、さすがにはやすぎるやろ」

ドアの向こうに立っているのは、黒田さんかもしれない。だとしたら引きずられるようにしてついてきた父も一緒だろうか。

あるいは両手*2に旅行のおみやげを抱えた祖母かもしれないし、さっそくくるみが見に来てくれたのかもしれない。

でも誰が来たとしても、ドアを開けるのは僕だ。

⑥裸足のまま三和土たたくにおりた。ゆつくりと開けたドアの隙間から差しこむ力スタードクリームみたいな色の朝の光が、冷えきった足の甲こにやわらかく落ちる。

(寺地はるな『水を縫う』より。なお、本文には省略等がある。)

*1 さっきの「気に入った？」の返事……完成したドレスを見て「わあ」と声をあげた姉に「僕」が「どう？ 気に入った？」とかけた言葉の返事。

*2 両手に旅行のおみやげを抱えた祖母……「今までやってなかったことぜんぶやりたい」と、一人旅に出ている。幼い頃、「僕」に刺繍の手ほどきをした。

問一 空欄 a～d に入る適切な言葉を、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。

ア だけ イ とも ウ でも エ かも

問一 傍線①「ガーゼをくふわふわとやわらかい」とあるが、このドレスの感触を通して「僕」はどのようなことを感じ取っているか。次の文に入る適当な言葉を、本文中から二十字以内で抜き出せ。

【二十字以内】とごうごうと。

問二 傍線②「でもく父は違った」とあるが、「僕」がこのように感じたのなぜか。解答欄に合うように、本文中の言葉を使って六十字以内で説明せよ。
【六十字以内】から。

問四 傍線③「でも、仕上げは清澄くんがやるんやろ？」とあるが、ここには黒田さんのどのような思いが込められているか。説明した次の文の空欄に入る四字熟語を、後の漢字を組み合わせてそれぞれ答えよ。

自分の手でドレスを仕上げられず【一】している「僕」に、刺繍の腕を奮って、【二】を成し遂げてほしいという思い。

- 一 【一】起意 生死 消気 回沈 【一】
二 【二】蛇天 尾竜 画点 睛頭 【一】

問五 傍線④「刺繍をはじめたきっかけはくそれだけではない」について、次の各問いに答えよ。

(1)「それだけではない」とあるが、「僕」が刺繍に興味を持つようになったのはなぜか。解答欄に合うように、本文中の言葉を使って五十字以内で説明せよ。

【五十字以内】から。

(2) 刺繍をはじめたきっかけを話すことで、「僕」にどのような変化がもたらされたか。本文中から一文で探し、はじめと終わりの五字を答えよ。

問六 空欄【一】に入る適当な言葉を、次のア～エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。

- ア ただ見ていてほしい。
イ 生きている、という実感がある。
ウ ひと針で線になり、重ねること面で面になる。
エ その熱のかたまりが僕の中で、音を立てて爆ぜる^は。

問七 傍線⑤「左肩からくいくつも施した」とあるが、「僕」が白と銀の糸で縫い上げた刺繍は、ドレスにどのような変化をもたらしたか。本文中から二十字以内の比喩を抜き出せ。

問八 傍線⑥「裸足のままくやわらかく落ちる」とあるが、この表現効果として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

- ア 暗中模索しながら、たった一人で自分の信じた道を歩もうとする「僕」の孤独な心が、繊細に描き出されている。
イ 試行錯誤しながらも、ついに想い通りの刺繍が仕上がった喜びが、みずみずしい筆致で描き出されている。
ウ 右往左往しながら、新たな道を進む「僕」を見守る周囲の人々の優しさ、細やかなタッチで描き出されている。
エ 紆余曲折ながらも、新たな道を歩み始める「僕」の緊張感が、厳かな筆づかいで表現されている。

□ 次の文章を読んで、後の問いに答えよ。

家というのは、人が住まなくなるとすぐに荒れてしまう。これは経験的に確かです。人が住んでいるほうが家の傷みは早いということはないのです。逆なんです。

X

壁が崩れ、屋根瓦が落ち、柱が歪む。不思議です。たぶん家というのも、そこに住んでいる人間から何らかの「生命力」のようなものを受け取って、それで生きていくのではないかと思えます。

*1がいうかん
凱風館は畳敷きですが、畳屋さんによると、「畳は呼吸している」のだそうです。部屋の湿度を一定に保つために、Aカンソウしているときは水気を吐き、湿ってくると水気を吸う。イグサは植物ですから、①地面から抜かれて、

織り上げられた後も、静かな生命活動を続けているのだと教えてもらいました。

漆喰の壁や、木材もそうなんでしょう。非活性的ではあるけれども、やはりある種の低レベルの生命活動をしている。そこに人間がいると、人間の生命活動と呼応して、それに賦活されて、家の畳や漆喰や柱も、少しだけ生命活動が活発になる。微妙に艶が出て、手触りがやさしくなる。そういうものじゃないかと思えます。

だから、人が住まなくなると、家の生命力もBオトロえる。あつという間に崩れてゆきます。奇妙な角度で柱がねじ曲がり、誰も踏まないのに床が抜ける。先日東京で見たC廃屋は、半年ぶりに前を通ったら、床下から生えた竹が屋根や壁を突き破っていました。人が住んでいる家で、筒が床を突き破って生えてくるなんて話、僕は聞いたことがありません。

そこに人が住んでいるというだけで、自然の力を押し戻す何らかの力が働いているということがあるんじゃないでしょうか。里山というのは文明と自然の緩衝帯だという話を前にしました。たしかに里山の住民たちは、山に入ったときには、蔓を切り払ったり、下草を刈ったり、水路や道路を整備したり……という「不払い労働」をしています。けれども、その程度の②軽作業で自然の圧倒的な繁殖力をa抑制できるということ自体、僕のような都市住民からすると、bにわかには信じられないのです。

山で暮らす哲学者である内山節さんはこのような「仕事」について③こう書いています。

山村にDダイザイしているときは、私はたまに村の人たちと一緒に山菜や茸を取りにでかける。そんなとき村の老人たちは、昔からの習慣に従って、鉦やノコギリ、縄などを腰に下げてくる。山道がふさがれているときは枝をはらい、蔓にからまれている木をみつけると蔓を切る。山や木の所有権が誰にあるかなど構うことはない。④山の生命力を維持していくことの前には、所有権など二次的な問題である。そして、最近ではこういう仕事を誰もしなくなった、と嘆く。(内山節、『自然と人間の哲学』、農文協、二〇一四年、四〇頁)

僕は「繁殖力を抑制できる」と書きましたけれど、内山さんは「山の生命力を維持していく」と書いています。この二つはたぶん同じ現象を違う視点から見ているのだと思います。自然の「繁殖力」がある限度内に収まっているとき

に、それを「生命力」と呼ぶ。

さきほど竹林に呑み込まれた廃屋のことを書きましたけれど、そこに人が住んでいる頃もたぶんその家の庭には竹林があったのだと思います。でも、そのときは、竹の繁殖力はある限度内に収まっていた。だから、それは庭の景観をかたちづくり、春には筍という食材を提供した。でも、人が住まなくなったら、竹の繁殖力はある限度を超えて、もう⑤人間にとつての有用性や使用価値とはEムエンのものになった。そういうことではないかと思ひます。

人間は自然の前に立つたときに、ほとんどそこに存在だけで、自然の繁殖力を少しだけ抑制することができ、自然を「生命力」と呼べる範囲に押しとどめておくことができる。

だから、人がそこに存在しているだけで、「家の生命力」は賦活され、「山の生命力」は維持される。「存在しているだけ」ではちよつと言葉が足りないですね。そこにおいて、「掃除」とか「片付け」とかをしていただけで、と言い換えます。内山さんが書いている「枝をはらい」「蔓を切る」というのは、家の場合だったら、「床を掃く」とか「打ち水をする」とか、そういうちよつとした作業のことだと思ひます。ただ、そこにいるだけじゃダメなんです。そこにわずかなりとも秩序をもたらそうと志向すること。だから、空き家に狐狸の類が棲みついても、たぶん家の崩壊は止まらないと思ひます。獣はたしかに生命体ではあるけれど、「家の中を片付ける」ということをしないからです。カオティックな世界にわずかなりとも秩序をもたらそうとするものが出現すると、それだけで世界はその表情を変える。

(内田樹『日本習合論』より)

* 1 凱風館……筆者が主宰する武道と哲学のための学塾。神戸市にある。

* 2 賦活……活力をあたえること。

* 3 緩衝帯……衝突や不和を和らげるため、中間に設けられた中立地帯。

* 4 不払い労働……労働賃金を払ってもらえない労働。

* 5 狐狸……キツネやタヌキ。

* 6 カオティック……無秩序。

問一 波線A「カンソウ」・B「オトロ(える)」・C「廃屋」・D「タイザイ」・

E「ムエン」のカタカナは漢字に直し、漢字は読みをひらがなで答えよ。

問二 二重傍線a「抑制」・b「にわか」の意味として適當なものを、次のア

〜エの中から一つずつ選び、それぞれ記号で答えよ。

a 「抑制」

ア 助けて、かえつてだめにする。イ おさえて、とめること。

ウ 弱みにつけこんで、支配すること。エ 押し広げて、ふやすこと。

b 「にわか」

ア 絶対に イ いつも通りに ウ 急に エ 客観的に

問三 次の言葉を用いて、空欄Xに入る文を二十字程度で答えよ。

「人・家」

問四 傍線①「地面から抜かれてく続けているのだ」とあるが、それはどうしてだと考えられるか。次の文の空欄に合うように、本文中の言葉を使って四十文字以内で説明せよ。

地面から抜かれたイグサが、その後も静かな生命活動を続けられるのは、

【 四十文字以内 】 ためと考えられる。

問五 傍線②「軽作業」とあるが、内山節さんの文章から「軽作業」にあたる

例を示した一文を探し、はじめと終わりの五字を抜き出せ。

問六 傍線③「こう書いています」について、次の各問いに答えよ。

(1) 自分の書いた文章の中に、他人の文章の一部をそのまま抜き出して使うことを何というか。適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア レポート イ 要旨 ウ 拝聴 エ 引用

(2) (1)における注意点として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 自分が書いた文章との区別がつくように示す。

イ 序論・本論・結論の構成を意識し、論理的に書く。

ウ 意見と根拠を分けた上で、具体例を提示する。

エ 体験と感想を読み分けて、主題をつかむ。

問七 傍線④「山の生命力を維持していく」とは、何を通して、どのようにしていくことを指すか。本文中の言葉を使って四十文字以内で説明せよ。

問八 傍線⑤「人間にとっての有用性や使用価値」とあるが、この内容を具体的に説明した箇所を本文中から二十六文字で探し、解答欄に合うようにはじめと終わりの五字を抜き出せ。

【 二十六文字 】 こと。

問九 次の文は、四人の中学生が本文の読後感を述べたものである。本文の内容と合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 人は、そこにいるだけで自然の中に秩序をもたらすことができるんだね。私も休み中の理科の課題の「観察」をしっかりとやろうと思ったよ。

イ そうかなあ。いるだけでは足りないんじゃないかな。秩序をもたらすためには、人間のちよつとした働きかけが必要になるんじゃないかな。

ウ そうだね。ただそこにいるだけでは、人間の圧倒的な生命力に、自然はかなうはずはない。自然破壊はどんどん進んでしまうよ。

エ 持続可能な社会を実現するには、人間がいかに計画的に自然と接し、共生できる未来を志向していくかが重要になってくるよね。

【三】 次の【古文】は『更級日記』の一節である。【古文】【現代語訳】【鑑賞文】

を読んで、後の問いに答えよ。

【古文】

いみじくも心もなく、ゆかしくおぼゆるままに、「この源氏の物語、一の巻よりしてみな見せたまへ」と心のうちにいひける。親の太秦に「もりたまへるにもことごとなく①このことを申して、出でむままにこの物語見はてむと思へど見えず。いとくちをししく思ひ嘆かるるに、をばなる人の田舎より上りたる所においたれば、「いとあうつくしう生ひなりにけり」など、あはれがり、めづらしがりて、かへるに、「何をかたてまつらむ。②まめまめしき物は、まさなかりなむ。ゆかしくしたまふなる物をたてまつらむ」とて、源氏の五十余巻、櫃に入りながら、在中将、とほぎみ、せり河、しちら、あさつづなどいふ物語ども、一ふくろとり入れて、得てかへる心地のうれしきぞいみじきや。はしるはしる。わづかに見つつ、心も得ず心もなく思ふ源氏を、一の巻よりして、人もまじらず、几帳のうちにつち取して引き出でつつ見る心地、後の位も何にかはせむ。

【現代語訳】

たいそうもどかしく、ただもう見たくてたまらないので、「この③『源氏物語』を、一の巻から終りまで全部お見せください」と心の中で祈っていた。親が太秦にお籠りなさるときにもお伴をして、他のことは何も願わず、このことばかりをお願いして、お寺から下がると、すぐにでもこの物語を全部通読するつもりで意気込んではいたけれど、そう簡単に見ることはできなかった。たいそう残念に思い嘆いていたところ、ある日のこと母が、おばにあたる人で地方から上京して来た人の家に私を連れていってくれた。するとそのおばが、「たいそうかわいらしく成人されたこと」などと、なつかしがり珍しがって、帰りに、「何を差し上げましょう。実用むきものはつまらないでしょう。欲しがっておいでとか伺った物を差し上げましょう」と言って、『源氏物語』の五十余帖を櫃に入れたままそっくり、それに『在中将』『とほぎみ』『せり河』『しちら』『あさつづ』などという物語をひと袋に納めてくださった。それを戴いて帰るときうれしさは天にも昇る心地だった。今までとびとびに読みかじって、話の筋も納得がゆかず、じれったく思っていた『源氏物語』を一の巻から読み始めて、邪魔も入らずたった一人で几帳の内に伏せて、櫃から一冊ずつ取り出しては読む気持、この幸福感の前には後の位も何にならう。

【鑑賞文】

*3 *4 かずきのくに

Tは上総国において、「物語」というものが読んでみたくてたまりませんでした。一緒に下向まもしていた継母まははや姉の口から、物語についての話を漏れ聞いて、「何て面白そう！」と、思っていたのです。

しかし、上総には物語など存在しません。継母や姉も、貴重な物語を田舎まで持ってくることはできなかつたし、もちろん書店などない。文化は、そう簡単に手に入るものではなかつたのです。

Tは、物語が読みたいあまり、等身大の薬師仏を造ってしまいました。そして身を清めてから、

「一刻でも早く京に上らせてくださり、数多あまたあるという物語を、ありつたけ私に読ませてください！」

と祈るほど、切羽詰まった思いを抱えていたのです。④この時代に「地方に住む」というのは、つまりこういうことでした。

(中略)

*6 すりよ

受領すりよであった父親の転勤に伴い、十三歳の時に上総国から京都へと戻ってきました。Tこと普原孝標女が京都の街並みを見て「さすが京都だわ」と感動した、といった記述は『更級日記』にはありません。彼女が父の家に戻ってきてからまず母親に対して言ったのは、

「物語を探してきて読ませて！」

ということでした。彼女にとって京都とは、「物語がある地」。上総国では、物語読みたさに仏像まで彫っていた彼女ですから、京に着いてまず思ったのが、

「物語はどこ？」

であっても、不思議はありません。

母親は、衛門えもんの命婦みょうぶという親戚に頼んでくれた模様です。衛門の命婦は、物語が書いてある立派な冊子を数冊、贈ってくれました。

Tはこの冊子を、昼夜ぶつ通して読み続けます。それはきつと、飢えた人が食べ物にありついた時のようだったことでしょう。

すぐに読み終えてしまったTは、「もつと読みたい……」と思うのでした。しかし、田舎から戻ってきたばかりのTの一家は、京都にそうコネがあるわけはありません。印刷技術がない時代、一冊ずつ書き写さなければならぬ物語は、貴重品。⑤衛門の命婦*7がくれた冊子も、さる貴頭*8が持っていたものを下賜されたということでした。

(中略)

*9

そんな折、田舎から京へと戻ってきた親戚の女性のところをTが訪ねた時のこと。

「あーらよく来てくれたわねTちゃん。すっかり大きくなって。きれいになったじゃない？」

とばかりに歓迎され、帰りにはお土産をもたせてくれることになりました。女性は、Tの性格をかねて聞いていたと思われ、

「実的なものをあげても、あなたは面白くないでしょう？ 欲しがっているって聞いたから……」

と、『源氏物語』を五十余巻のセット、のみならず他の物語の数々も、持たせ

てくれたではありませんか。

⑥ Tはこの瞬間、「盆と正月が一緒に来た」程度の表現では間に合わないほどの喜びを感じたことでしょう。それまでは『源氏物語』の一部しか読むことができなかったのです。胸をときどきさせつつも、もどかしい思いでいつぱいだったT。それが最初から全て、読むことができるのですから。

几帳の内にもって腹ばいになり、彼女は読書に没頭しました。誰からも邪魔されずに、好きなだけ『源氏物語』を読む。Tはこの幸福感を、

⑦

と、表現しています。

【古文】と【現代語訳】は大養廉 校注・訳『更級日記』より。

【鑑賞文】は酒井順子『平安ガールフレnds』より。

*1 太秦……京都の地名。ここではその地にある広隆寺という寺を指す。

*2 櫃……ふたの開く大型の箱。

*3 T……『更級日記』の作者である菅原孝標女すがわらたかすゑのむすめを指す。平安時代の女流作家。

*4 上総国……今の千葉にあたる地域を指す。

*5 下向……都から地方へ行くこと。

*6 受領……平安時代の地方長官。

*7 貴顕……身分が高く、名声があること。

*8 下賜……身分の高い人が、身分の低い人に物を与えること。

*9 そんな折……落ち込むTに、母が『源氏物語』の一部を与えてくれた。

問一 二重傍線 a「うつくしう」・ b「あはれがり」・ c「わづかに」を現代仮名遣いに直し、全て平仮名で書け。

問二 傍線①「このこと」が指す内容を【古文】の中から探し、はじめの五字を抜き出せ。

問三 傍線②「まめまめしき物」の意味を、【現代語訳】の中から七字で抜き出せ。

問四 傍線③『源氏物語』の作者名として適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア 松尾芭蕉 イ 紫式部

ウ 兼好法師 エ 清少納言

問五 傍線④「この時代に」ということでした」とあるが、「このこと」とはどのようなことか。四十字以内で説明せよ。

問六 傍線⑤「衛門の命婦がくれた冊子」とあるが、これを読んだ時の「T」の様子を比喻で表した一文を【鑑賞文】の中から探し、はじめと終わりの五字を抜き出せ。

問七 傍線⑥「Tはこの瞬間を感じたことでしょう」とあるが、Tが大きな喜びを感じた理由を、五十字以内で説明せよ。

問八 空欄⑦に入る言葉を【古文】の中から十字で抜き出せ。